

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本には、全てのものに神が宿るというアニミズムの考え方がある。昔の人々は、海や山、風、雷、(A) 道具にも神の姿を見てきた。(B)、あらゆるものを神としてまつり大切にした。

こうしたアニミズムの考え方は江戸時代になると薄れていく一方で、付喪神つくもがみが描かれるようになった。付喪神とは、古くなった物に霊などが宿って生まれた妖怪だ。

江戸時代中期の絵師・鳥山石燕とりやませきえんは、妖怪画集『百鬼徒然袋』ひゃくきつれづれぶくろに付喪神を描いた。(C)、「雲外鏡」うんがいきょうは、鏡に怪しい顔が浮かび上がっている。「木魚達磨」もくぎよだるまは、葬式などで使われる木魚の妖怪だ。名前の通り、(D) インドの僧侶・達磨大師だるまだいしのような姿をしている。

江戸時代以前の文献には、雲外鏡や木魚達磨の記述が(E)存在しない。(F)、雲外鏡も木魚達磨も石燕が創作した妖怪だ。このように、江戸時代には、たくさん付喪神がキャラクターとして生み出されていった。

問 文中の(A)～(F)に入る語としてふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使用してはいけません。

- ア たとえば イ つまり ウ まるで エ さらに
オ しかし カ まったく キ だから